
これから小説を本気で書こうと思っているあなたへ

舞傘 真紅染

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これから小説を本気で書こうと思っているあなたへ

【Nコード】

N 6 7 4 4 P

【作者名】

舞傘 真紅染

【あらすじ】

あなたは本当に“小説”というものが書きたいのでしょうか？
小説の書き方、ではなく。小説を書く上での注意点や思ったことなどをつらつら書いています。注意と言っても「絶対にこうしなければならぬ！」わけではありません。

あくまでも私個人の意見なので参考程度にどうぞ。

意見に対する反対意見は随時受付中ですが、ちゃんとした理由も一緒に述べていただけると助かります（こうだからこう思う）。

なお、当エッセイ内で使用している例文はこのエッセイ用に書いた

たものです。節度の範囲内ならご自由にお使いくださってかまいません（ただし責任は負いかねます）。

設定をしっかり考える（前書き）

異世界ファンタジーと銘打ってますが、設定をしっかり練ることの重要性についての話です。なのでその他のジャンルにも通用する話だと思っています。

設定をしっかり考える

【これから小説を書こうと思っているあなたへ】

私が小説を書きながら思ったこと、読者の立場で思ったことをつらつら書いています。

あくまで私個人の考えなので「絶対こうしなければいけない!」わけではありません。こういう意見もあるのだと思っていただければ幸いです。

安易に異世界ファンタジーを選ぶのは危険!

書くためには知識というものがが必要です。スポーツについて書かれるならそのスポーツを熟知していないと書けません。歴史小説を書くのなら歴史を知らなければ話になりません。でも異世界だったらどうだろう? 自分で考え作った世界なのだから知識なんて関係ない?

いえいえ、これが関係あります。知識がなくては世界を作り上げられないからです。え、どうしてかって? ではお聞きします。

あなたの世界に住んでいる人たちは何をして生計を立てていますか? 何を食べていますか? どんな服を着ていますか? 人口はどのくらいですか? 国や政府はありますか? 文明は? 宗教は? 季節はありますか?

もっとお聞きしたいことがあります。これくらいで止めておきます。

こんな質問をすると「俺の話に一般人の生計などでてこない!」「人口など知るか」と思われるかもしれませんが。でもちよつと待ってください。あなたは世界を作る神様です。神様が自分の作る世界に無責任ではいけません。自分の作った世界です。ちゃんと愛して

正面から向き合ってください。

これらの設定は小説を書く上での“旨味成分”ともいえる大事な場所です。この設定を考えるためにはまったくの無知では書けません。

たとえば機械文明が発達していない世界を書くときです。機械がない生活を細かく思い浮かべてみましょう。

その世界に住む人たちは、朝何時ぐらいに起きるのか。どんなものを身につけているのか。気候は暖かいのか寒いのか。火はどうやってつけるのか。食べ物は何をどうやって食べるのか。トイレは、家の作りはどうだろうか。

火打石なんてものがありますが、あれは石同士をぶつけても火がつかないことを知っていますか？ 想像だけで知らずに使ってしまうと恥をかくことなんかも多々あります。

なのである意味で異世界を作り上げるのが一番大変だと思うんです。雑多な知識が必要ですからね。

もちろん、知識がなければ異世界を書いてはいけないわけじゃないです。必ずしも『この国には●○人いて国民は皆これこれこういう格好をしてあれで生計を立てて』などと設定を説明する必要はありませんので。

物語上必要な部分を作り上げ、必要な時に描写すればいいのです。

で、結局それらを考えることがなんに繋がるのか。それらの細かい部分をきちんと作り上げることによって表現が変わると言うことです。

例えば、

・アサドという村に辿り着いた。百人程度の小さな村だ。

という一文があつたとします。ここで“百人”と“小さな村”について考えてみましょう。村がある世界の人口が一億人だとすれば、百人は確かに小さい村となります。ですがこの世界の人口が千人だったらどうでしょう。百人の村は小さいでしょうか？ 大きいですよね。もし世界の人口が千人なら先ほどの一文はきつと、

・アサドという村に辿り着いた。百人もいる大きな村だ。

と変わることでしょう。そして百人も、と表現されることで読者は「百人が多いのなら世界の人口は少ないのか」と世界の人口を説明されずとも推測できます。このような書き方は作者が世界の人口を知っていなければできません。

今の例は分かりづらかったでしょうか。もうひとつ例を。今度は情景描写です。

・視界一面に田んぼが広がっている。

想像してみてください。………しましたか？ では、これをいろんな表現で書いてみます。

- ・視界一面に金色に色づく稲穂が揺れている。
- ・視界一面に水が張られただけの田んぼがある。
- ・視界一面に青々とした苗が植えられている。

私の文章力がないのはさておき。どうでしょうか。ただ“田んぼ”と書かれているのとの下の三つでは大分違うと思います。小説内に田んぼでないし、という問題ではないですよ。

このようにちょっとした風景の描写を入れることで季節が分かります。これはちゃんと書く側が「今の季節は秋だ」と考えていなければ書けません。

え？ 異世界の話からずれている？ いえいえ、そんなことはありませんよ。

なぜなら季節をにわす描写をすることでその世界に季節があるのだと読者に教えてくれます。だって異世界ですもの。四季が当たり前にあるとは限りません。田んぼが当たり前にあるとも限りません。これを書くことで異世界人の生活も少しうかがえます。田んぼの中に人を付け加えてどんな作業をしているか書けば文明も判明します。

・腰を曲げて苗を植えていたその人は疲れたのか、一度背伸びをした。

・その人が操る田植え機が次々と苗を植え付けて行く。

上は手作業で、下は機械。同じ田植えなのに全然意味が違います。これもまた作者が世界のことを熟知していないと書きわけることができます。

そして手作業で田植えをするのが当たり前なら機械文明は発展していないと推測できます。なのできつとミシンやポットなんかもないでしょう。なのに突然「ポットでお湯を沸かした」という文章があれば読者は「アレ？」と思います。田植え機はないのにポットがあるのならその理由を考えねばなりません。

ミシンがないなら服を作るのはどうやっているんだろう。お湯を沸かすのはなにでしているのだろう。そもそも布はどうやって作っているんだ。お金という概念はあるのか。お金があるならどこが作っているのか。国が違ってもお金は一緒なのか…… e t c。

それとも面倒だから“魔法”という“マホウ”の言葉で解決しちゃいますか？

魔法で服を作る。じゃあその魔法は誰にでも使えるのか。誰にでも使えるとしたら皆服なんて買いません。自分で作ります。服が作

れるのなら大抵のモノは自分で作れそうです。となると、その世界で商売が発達すると思いますか？ おすそ分け、なんて言葉もないでしょうね。だって自分で自分の分を作ればいい。すると人同士の交流が希薄になるかもしれない。国どころか村もないかもしれない。安易に魔法という言葉に頼ると世界が崩壊しかねませんのであまりお勧めはしません。

と、まあ一つの世界を作り上げるわけですから、設定というのは奥深いことはご理解いただけたと思います。なので作家さんは日々たくさん本を読んだり、取材に行ったりして、蓄えた知識を世界設定に活かすのです。

世界の創造というのは大変です。だからといってその大変な作業をさぼると世界に矛盾が起きたり、内容の浅い物語になってしまいます。また読者の方に「この作者はろくに世界を作っていない」と思われかねません。

もちろん設定を作るのはある程度でかまいません。細かく考えすぎたらいつまでたっても小説は書きませんから。設定作って満足して小説書けない、なんて落とし穴もありますからね。

でも深く考えれば考えるほどそのお話には現実感がともない、矛盾も減り、読者を違和感なく異世界へいざなえるのは間違いないと断言します。文章力ももちろん必要ですけど、下地がないとたとえ文章が上手でもその世界に惹かれなれないと思います。最低でも物語を描く上で矛盾がない程度には作り込む必要があります。

私が設定作りこんでいるなあといつも唸るのは「十二国記」ですね。小野先生の世界は文句のつけどころがない。文章に独特な雰囲気のある方なので好き嫌いあると思いますが、本気で独自の世界を作り上げようと思っている方は一度読んでみるのをお勧めします。表現方法も秀逸です。

偉そうに言った自分はどうかっしてお話ですよね。全くです。精進します。

ただ今回私が言いたいの「異世界ファンタジーだと簡単そうだ」という理由で異世界モノに手を出さない方がいい、ということなんです。どうしても異世界モノが書きたい。私はこの世界を愛してる！という方はどんどん書いちゃってください。きっとあなたの世界も喜ぶはずですよ。

では皆さん一緒に創作活動を楽しみましょう！ 日々精進精進！

設定をしっかりと考える（後書き）

加筆修正（11・07・05）

感想について

書くお話を決めて、プロットもキャラクター設定もばっちり。さあ書くぞ！

の前に、忘れてはならないことがあります。

謙虚な姿勢を忘れずに！ 感想はちゃんと受け止めよう！

小説を書いたらやっぱり誰かに見てもらいたい。そして感想が欲しい。褒められる方の感想を。

そんな気持ちの表れなのでしょうが、「感想は受け付けるけど批判は受け付けません」と書いている人をたまに見かけます。私はちよつと待つてくれと言いたい。感想という言葉の意味は『物事について、心に感じたことや思ったこと』（goo辞書より）です。つまり、作品を読んで悪く思ったことがあれば、それも感想なのです。もちろん言われのない誹謗中傷などは感想ではありません。それらであなたが傷つく必要も、またそのような書きこみをする人を相手にする必要ありません。

誰だつて自分の成果を認めてもらいたいものです。「面白かったです。次回も期待」なんて言葉があれば意欲も上がります。逆に「つまらなかった」というような言葉をもらつと落ち込みます。だから悪いことは書かないでくれ、と言いたいのも分かります。

でも、ですよ。

きちんとした感想をくれた人はちゃんとあなたの小説を読んでくれたのです。じゃないと感想など書けません。自分の時間を削つて小説を読んでくれた上に、感想まで書いてくれた。それはとても素晴らしいことなのです。

あなたは誰かの感想を書いたことないでしょうか？ もしないのであれば、一度は書いてみるべきだと思います。真剣にその方の作品を読み、思ったことを伝えるように書く、というのは中々大変です。ただ面白かった、ではなく。どう面白かったのか。キャラクターが面白かったのか。設定が面白かったのか。セリフ回しが面白かったのか。残念な場所があればどう残念に思ったか。

具体的に書けば書くほど、作者は「この人真剣にこの作品を読んてくれたんだな」と思って嬉しいはずです。少なくとも私は嬉しい。

大変な思いをしてまで読者の方があなたに伝えてくれたメッセージ、しっかりと受け止めましょう。

何よりも真摯に受け止め、反省することであなたの作品はもっと色づくはずです。前の反省を生かして次回作を書けば、前感想をくれた人も「私の言ったこと伝わってたんだ」と喜んでくれるでしょう。よくいけばあなたのファンになってくれるかもしれません。

創作活動と言うのは一人で行っているようで、その実全然一人ではないのです。そのことを忘れずに創作活動を続けてください。

感想について（後書き）

空行を入れて見やすくしました（11・04・12）。

一人称？ 三人称？ 視点？

設定はちゃんとしたし、感想を受け止める準備もバッチし。よし、書くぞ！

いよいよ、文章を書いていきましょう。

あなたの文章は誰視点ですか？ 一人称ですか？ 三人称ですか？

視点・一人称・三人称とはなんぞ。知っている方もいるでしょうが復習程度に。分かってるやいつて方は●までとんじゃってください。

←以下goo辞書より←

【視点】（してん）

- 1 視線の注がれるところ。
- 2 物事を見たり考えたりする立場。観点。「―を変えて考える」「相手の―に立つ」
- 3 透視図法で、画像と直角に交わる仮定の一点。対象を眺める位置。

【人称】（にんしょう）

文法範疇はんちゆうの一。動作の主体が話し手・聞き手・第三者のいずれであるかの区別。それぞれ、第一人称一（自称）・第二人称一（対称）・第三人称一（他称）とよび、いずれかはつきりしない場合、これを不定称といふことがある。人称の区別は、人称代名詞の使い分けや動詞の語尾変化などに現れる（日本語の場合は前者のみ）。

【一人称】（いちにんしょう）

文法で、人称の一。話し手、書き手が自分自身また自分自身を含む仲間をさす語。日本語では「わたくし」「わたくしたち」「ぼく」「ぼくら」「われ」「われわれ」など。第一人称。自称。

【三人称】（さんにんしょう）

文法で、人称の一。話し手（書き手）・聞き手（読み手）以外の人または事柄に関することを示すもの。「彼」「彼女」「これ」「それ」「あれ」「どれ」など。日本語では代名詞についてだけいい、また西欧語では動詞の語形などにも関係する。第三人称。他称。

→ goo 辞書 こまで →

ちょっと分かりづらいですね。

まず視点ですが、文章を書く上の話なら2が該当します。つまり、文章は誰目線なのか。今書いているこの文章で言うと「私」の目線です。

人称は文体です。何人称かによって向き不向きな事があります。そしてこの二つを使って「。人稱 視点」として物語を書くわけです。

● 視点だとか、人称だとかが一体どうした？

文章を書く際は、誰視点で書くのかを決めてください。と、いうものもよっちゅうしょっちゅう視点が入れ替わるのは御法度とされているからです。

最初はAの視点だったのに途中でBになって、またAになったかと思えば最後はCになっていた。

どういふことか例を出しましょうか（一人称）。

朝起きてリビングに行くと母親が朝ごはんを作っていた。私は目をこすりながら、

「おはよう」

「おはよう。あと少しでご飯できるから」

挨拶をしてきた娘はまだ眠そうで「うん」という返事も消え入り
そうなほど小さかった。苦笑する。

「顔洗ってさっぱりしてきなさい」

「そうする」

母親に言われてのそのそと洗面台へ行くと、父親が鏡を占領して
ひげをそっていた。

「お父さんおはー」

「ああ、おはよう。……ほら、顔洗え」

「ありがと」

あまりに眠そうな娘に呆れて、仕方が無いなと場所を譲った。

相変わらず文章力ありませんがまあまあさておき。

分かりますでしょか。最初は「私」の視点だったのが、「母親」
になり、また「私」に戻って「父親」に。

今回はまだ分かりやすいですが、こんな感じにたびたび視点が変
わったり、ずっと「私」の視点だったのが突然「彼」になったりす
ると読者は混乱します。

読者は物語の中、物語の語り手に感情移入します。しかし、語り
手一（視点）がコロコロ変わると『んんん？ 一体自分一（語り
手）は誰なんだ？』となり、感情移入できず、冷めてしまいます。

Q：でもでもプロの作家さんで視点変更している人いたよ？

A：それはプロだからできることです。シロートが手を出しても
失敗するだけなので止めましょう。

次に人称の話をしていきましょうか。

先ほどの例を三人称で書きます。尚、私の名前を『ハナコ』とし
ます。センスは気にしないでください。視点は神様視点というやつ

です。

朝起きてハナコがリビングに行くと母親が朝ごはんを作っていた。目をこすりながら、

「おはよう」

「おはよう。あと少しでご飯できるから」

相当眠いのか。ハナコの声は判然とせず、小さい。母親は苦笑した。

「顔洗ってさっぱりしてきなさい」

「そうする」

母親に言われてハナコのそのそと洗面台へ行くと、父親が鏡を占領してひげをそっていた。

「お父さんおはー」

「ああ、おはよう。……ほら、顔洗え」

「ありがと」

あまりに眠そうなハナコに呆れた様子をしながら、父親は場所を譲った。

分かりやすくするため毎回主語にハナコ、母親、父親といれてあります。

さつきと比べてみてどうでしょうか。なるべく一人称のものと近い簡潔な文章にしましたが、本来三人称だともっと細かい描写ができます。

一人称の利点は視点キャラの心理描写が事細かに出来る点ですが、視点キャラの知りえない情報は描くことができません。しかしテンポは非常によいです。が、描写できる事が限られていたり、幼稚っぽくなりやすい欠点があります。

三人称の利点は視点キャラ以外の描写ができる点ですが、上記の

視点変更でも書きました通り、混乱や感情移入の阻害を招く可能性があります。また、少々心理描写が苦手です。テンポも一人称に比べると落ちますし、どこか堅苦しさがあります。が、視点キャラの知りえないことも描けます。

書いている私が混乱してきました（笑）。とりあえず以下のことに注意しましょう。

・一人称「私」視点なのに私が知りえないことを描写しない。

どういうことか。それはAが心の中だけで考えたことは教えてもらわないと「私」には分からない、ということです。当たり前ですが、意外と守れていない方は多いです。

また「私」が実際にどんな表情をしているのか、も普通は分かりません。笑ったという自覚はあっても本当に笑ったのか。どうな笑顔だったのか。自分で自分の顔は、通常見れませんから。

私は笑ったが、泣いているようだった。

→みたいなのは通常ありえませんが。鏡がある、だとか。超能力で心が読めるなどの理由があれば別です。

【何人称なのか、誰視点で文章を書いているのかは“常”に意識しましょう】

同じ文章でも人称を変えただけで印象は変わります。どちらがいいのか、は一概に言えません。作品の雰囲気決めてください。

▲どっちにしていいか分からない方へ（参考程度にどうぞ）▼

一人称は現代モノで軽めな内容（一コマディーなど）。三人称は異世界モノに向いてると、私は勝手に思っています。

一人称は描写が苦手なので世界の描写を少なく出来る現代モノがいいでしょう。また、テンポが良いのでほとんど話が進みます。ただし、テンポ良く進みすぎて読者を置いてけぼりにしないよう注意しましょう。

三人称は描写が得意なので世界について説明が必要な異世界ものに向いていおり、重厚感があるため、作品に重みを持たせやすい利点があります。ただし、あれもこれもと描写しすぎてテンポが悪くなりがち。

なろうでは一人称が多く、好まれているようです。また文章初心者には一人称の方が書きやすいようです。

どちらにせよ、後は書き手の技量次第でいくらでも変わります。慣れです、慣れ。

日々精進あるのみ！

一人称？ 三人称？ 視点？（後書き）

自分的には三人称の方が好きです。一人称もいいんですが、どうも描写が少なすぎて作品に飲み込めないのが多い—（プロのものを除く）。

一人称でもある程度の描写は必要です。

人称について書き換え（11・04・08）。

前準備の前——文章作法について（前書き）

基本内容は文章作法についてですが、ところどころに表現についての考え方が交じっています。

前準備の前——文章作法について

文章作法についてもやってほしいというメッセージをいただいたため、今更ながらに文章の作法をやります。

前準備も前準備！ 小説を書くなら知っておこう！

小説以外でも文章作成時に覚えていて損はないと思います。

俺は自由だ！ 作法なんか知るか！

と、思われるかもしれませんが、何故作法を知っていた方がいいかをまず少し。作法だけ知りたい方は←の●まで飛んでください。

賞に応募しようとしている方は必ず守りましょう。じゃないと中身をろくろく読まれもせずには落とされます。

応募なんかしない。気軽にやる、という方もなるべく守った方が良いです。と、いうのも

「あ。この人文章の書き方知らないんだ」

読者の人にそう思われてしまうからです。気にしない方もいるでしょうが、下手すると中身を読んでももらえません。私なんかはほぼ読みません。統計などは知りませんが、こういう方は結構おられるんじゃないでしょうか（疑問系）。読書家の方とか……あれ、いない？ 段々不安になってきたので深く考えない事にします。

中身が面白い面白くないかではなくて、作法が守られていないから読んでももらえないなんて悲しすぎます。なので、守るのが無難。第一『文章作法が守られた文章だから読まない』人は、まあ、ほとんどのいないでしょうし。逆はあれど。

それに論文や仕事での文章作成時にも、作法を知っていると恥をかかずにすみます。

では、作法を見てみましょう。

以下の文章は、

「本気で小説家になろう」クロワッサン（企画開催中）様（<http://ncode.syosetu.com/n72701/>）と。

ライトノベル作法研究所様（<http://www.raitonoveru.jp/>）

を参考にさせていただきました。

どちらも勉強になるので文章作法以外もお勧めです。

●文章作法＋例＋説明＋一言●

・改行について。

行頭は字下げをする（一マス開ける。空白にする）。

○腹時計が時を告げた。

「うつ。もうこんな時間か」

○俺は腕時計で正確な時間を確認し、うめいた。飯を作るのは面倒だが、外に食へに行く余裕はない。給料日前は懐が寂しい。

○仕方が無いかと立ち上がって台所に向かった。

分かりやすくするため、空白の箇所にもをいれてあります。書く際に。入れちゃ駄目ですよ（笑）。

段落前に開けます。「」で行を変えた時もまた空白を開けます。ただし、「」の前には空白はいれません。下げるのも間違いではないみたいですが、私は下げません。

段落は結構大事で、適度に改行しないと大変見にくい文章になります。読者の目を圧迫し、文章の内容すら頭に入らなくなるので、改行はしましょう。

だからといって一文ごとに改行するのもあまり良いとはいえませ

ん。ぶつりぶつりと文章ごとに途切れ、幼い文章になり、これもまた読みにくいです（私的には）。ただまあ、箇条書きに似ているため分かりやすくはありますが、理由も無く使うのはおすすめしません。

効果が良く分らない方は、→の文章作法を知っておいた方がいい理由、の箇所をコピーして試してみてください（自分で文章作っても良いですよ）。

・三点リーダー（…）、ダッシュ（—）の使い方。

二の倍数個並べる。また中黒三つ（・・・）は違います。

「お前……無事だったのか」

「——なん、だと？」

通常は二個で使います。…は間違い。……を一セットと考えましょう。

しかし、やたらと長くつかいすぎるのはお勧めしません。長い沈黙を表したいのなら記号に頼らず文章であらわしましょう。

・感嘆符（！）と疑問符（？）の使い方。

一、使った後は一マス開ける。

「え？。今何ていった？」

「だから！。あそこに芸能人がいるんだって！」

分かりやすくするため、空白の箇所に。をいれてあります。書く際に。入れちゃ駄目ですよ（笑）。

ただし、閉じカッコ前には空白を開けない。

二、多用しない。

「ぶはっ！！！ それマジおもしれー！！！！！！！！」
「えっ？ 何？ 何で笑っているの?????」

気持ちとは分からなくも無いです。たくさん使った方が気持ちが伝わりそうですからね。

しかし、読む側としてはうっとおしい。
無理に記号に頼らず文章で表しましょう。三点リーダーの話でもそうですが、記号に頼らず文章で表すように心がける事は文章上達の上でも重要です。

「ぶはっ」

思わず飲もうとしていた水を噴出し、けほけほとむせながらも腹を抱えて笑った。突然大声で笑い出した俺に、彼女は目を丸くした。
「え？ 何？ 何で笑っているの？」

まるで意味が分かっていない様子がさらに笑いを助長した。

こんな風に、なるべく文で表現するように心がけ続けたら、きっと文章は上手くなる！ と、私は信じてる。

・句読点（ ）。 や 、 （ ） の使い方。

一、文章の終わりには必ず句点（ ）。 （ ） をつける。適度に読点（ 、 ） をつける。

基本中の基本ですね。後長い文章の場合は、読点もつけましょう。どこにつけたらいいか分からない場合は声を出して実際に読んでみるといいです。息継ぎをしても不自然ではない場所にいれるといいです。

あまりにも文章が長くなる場合は一端文章を終えたほうが吉。

二、とじカッコ（ ） 「 」 の前に句点（ ） 。 （ 読点 ） 、 （ ） を置か

ない。

「よお。田中じゃねーか。久しぶり」

普通文章の終わりには句点（。）をつけますが、閉じカッコの前にはいりません。

でも昔は閉じカッコの前には句点を置いてたそうです。厳密に言うの間違いつてわけでもないらしいのですが、今は置かないのが主流なので置かない方が無難でしょう。

・禁則処理について。

『きんそくしより禁則処理とは、約物などが行頭・行末などにあつてはならないという禁止事項のこと。また、それを回避するために字詰めや文の長さを調整したりすること』（ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%89%87%E5%87%A6%E7%90%86> より）

『約物（やくもの、英：punctuation mark）とは、文字組版など言語の記述に使用する記述記号類の総称で、句読点・疑問符・括弧・アクセントなどのこと』（ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%84%E7%89%A9> より）

例をあげると、行の頭に句読点（。）、や、（）、音引き（コーヒ
ーの“ー”の部分）、疑問符感嘆符（？や！）、閉じカッコ（
）は持つてきてはいけません。逆に行の終わりに始めカッコ（
）は持つてきてはいけません。また、分離禁止文字（……や——）が
二つ（…と…）に分かれたりしないようにする必要があります。

とはいってもワープロだと勝手に禁則処理を行ってくれますし、
なろうでも勝手に処理してくれるつばいので気にする必要はありません。
こういうことがあるのだけは頭の片隅においておきましょう。

大体上記が守られていれば問題ないと思います。間違いがあった場合は教えてください。すぐ修正します。

とりあえず最低限のルールは守りましょう。

他の守った方がいい表現については上記にあげた「本気で小説家になろう」クロワツサン（企画開催中）様（<http://ncode.syosetu.com/n72701/>）とライトノベル作法研究所様（<http://www.raitonovel.ru.jp/>）の方を参照してください。……後々また書くかもしれないですが。

ルールに慣れていない方は、どんな文章を書く時にもルールを意識すると良いでしょう。感想を書く時、日記を書く時、メモを取る時……等々。意識して慣れる必要があります。

最後に、改行・記号・（笑）や（汗）・顔文字についてを補足します。

ネット小説では間に良く空白の行を入れる事があります。それも一つの技法です。見やすくするためにもある程度は構わないと思います。

ただし、間を表現するためだけに十何行もあけたりするのは自分的にはちよつとな、と思います。

そういった表現の方が好きだといわれたらそれまでです。でも、何度もここで述べている通り、空白の行で沈黙やら間を表現するよりも、文章で表そうとした方が上達するはずです。記号、顔文字についても以下同文。

当文（これから以下略）は小説ではないため、（笑）なんか使ったりしますが、小説内では使ってません。

それは何故か。

頼ると文章が上達しないというのもあります。……まあ、例を見てください。

「ははっ 全くそうだよな（笑）」

「ははっ 全くそうだよな」

彼は頭をかきながら、恥ずかしそうに笑った。

「ははっ 全くそうだよな」

彼は豪快に笑って俺の背中をばしばし叩いた。

面白みのない文章なのはさておき、この三つをどう思いますか？
印象が随分違うはずです。

笑うという一つの行動だけでもいろいろあります。明るい笑いな
のか。泣き笑いなのか。声だけが笑っているのか。陰気な笑いな
のか。照れ笑いなのか。…… 明るい笑いにしても表現の仕方はたくさ
んあります。しかし、（笑）ですましてしまうと、どんな笑いな
のか分かりません。

描写は大事です。

何度だって言います。描写は大事です。一人称の文章でだって描
写は必要です。

最初は描写しすぎるぐらいで行くのがいいと思います。推敲した
時に余分な箇所を消せばいいんです。そのうち慣れて余計な描写は
しなくなるでしょう…… たぶん。私もちょうどいい描写量が分かっ
ていないので何ともいえませんが。

ま！ そういうわけががんばりましょう！

前準備の前——文章作法について（後書き）

長々、うだうだの文章にお付き合いいただいております。ご意見・ご感想はいつでも受け付けております。

書き上げた後すること

はっはっは！ 小説書けたぜ。なんてすんばらしいものができたんだ。これはぜひともネットに載せて皆に見てもらわなければならないが、投稿する前にちょっと待った！

完成した小説は少し寝かそう！

寝かす、とは数日間その小説をしまうということです。

えーっ！ という不満の声が聞こえてくるような気がします。気のせいということに進み……ません。何故寝かした方がよいかをまず考えてみましょう。

一番の問題は、完成した後の作者の状態です。

完成したらやはり嬉しいものです。とてもすばらしいものが出来た気がして、今すぐ誰かに見てもらいたい。つまりは興奮状態にあります。個人差はあると思いますがね。

興奮状態で見直しても冷静に作品を見ることが難しい。そこで、興奮を冷ますために小説を寝かすんです。途中でやつぱりすぐ投稿したいとなるかもしれませんが「一晩寝かせた方がカレーは美味くなる」と言い聞かせ（笑）、我慢しましょう。私は大体二、三日あけてます。一週間ぐらいあける人もいるようですが、最低でも一日はあけましょう。

●推敲しよう！●

よし！ 一日待ったからUPするぜ！

いやいやいや。時間を置いただけじゃ意味がありません。推敲しましょう。

←gogo辞書より←

すいこう【推敲】の意味

「名」^{スル}《唐の詩人賈島が、「僧は推す月下の門」という自作の詩句について、「推す」を「敲く」^{たた}とすべきかどうか思い迷ったすえ、韓愈^{かんゆ}に問うて、「敲」の字に改めたという故事から》詩文の字句や文章を十分に吟味して練りなおすこと。「―を重ねる」「何度も―する」

→辞書ここまで→

しかし興奮状態だと誤字脱字や変えた方がいい表現などに気づけない可能性が高いです。

他者に確認してもらうのが一番いいのですが、自分で推敲する場合は冷静になり、頭の中を作者ではなく一読者に切り替えて読まなければなりません。これが意外と難しい。

一読者の目線になるというのは、作者の目線と読者の目線が大きく違うからです。当たり前ですが作者にはその小説内容に関する事前知識があります。でも、読者の方にはない。読者の方に小説の面白さを知ってもらうためにも、自分が読者となって「ここは変じゃないか?」「こうした方が分かりやすいな」と頭を悩ませるべきでしょう。

また、推敲をする事で誤字脱字を減らす事も出来ます。誤字や脱字が多い文章は分かりにくいだけでなく、読者の方に「何ていい加減なものを載せるんだ」と思われる可能性もあります。とっても面白くてもあまりいい印象はもたれないので、気をつけましょう。

たとえ趣味だからといっても、最低限度の責任は持つべきです。それに誤字脱字の少ない文章はそれだけでもいい印象を与えてくれます。

推敲というものは大事です。書き上げた後だけでなく、書いている途中でも何度も推敲することで完成度の高いものが出来ると思います。

筆が進まなくなった時、見直して推敲していると気づくことは結構あります。私はそれでスランプを何度か克服したこともあるのでどうしても先に進めなくなった時、見直してみるのも一つです。

・まとめ

未完成でも何度も推敲する。

読者目線で推敲する。

自分の作品に責任を持つ。

注意点としては推敲をしまくって一向に話が進まない、という状況にならないように、ですね。

では、ともにまい進しましょう。

じつじつのはやめよう)(11・05・29一部修正)(前書き)

【構成】

- SIDEキャラ名・キャラ名SIDE(11・05・29修正)
- 会話分(「」)の前にキャラ名(11・04・19追記)
- やたらと難しい漢字・言葉を多用する
- 文章作法が守られていない文章
- 一文一文で改行している・改行がやたらと多い・改行が全くない(少ない)
- 目が痛くなる配色や見にくい背景&小さい文字サイズ

じつじつのはやめよう（11・05・29一部修正）

萎える文章つてのがあります。これは私だけなのかもしれませんが、とりあえずこういうのは避けた方が無難だろうということについて（思いつき次第増える可能性大）。

今回はちよつと辛口かもしれません。

中身うんぬんではなく、読む気をなくさせる文章つて？
さてさて。一体どんなもののか、見ていきましょう。

● S I D E キャラ名・キャラ名 S I D E ●

小説内で上記のような表記があると、私は途端に読む気をなくします。

「え？　なんでさ。分かりやすいでしょ？」

と、思われるかもしれませんが理由を述べましょう。……その一文、本当に必要ですか？

きちんと書かれている文章なら、その一言がなくとも読者の方に「誰視点」なのか伝わるはずです。親切心で書いたのかもしれませんが、

「君たちには分からないだろうから書いてあげたよ」

と、読者を馬鹿にしていると思われかねません。とりあえず私は、あまりいい気分はしませんね。

ちゃんと書いた文章だと思っているから公開しているんですよ？　ならばあとは読者の方を信じるべきです。誰の視点か分からない

い（分かりづらい）という意見がきたら、その時はちゃんともう一度その文章を見直しましょう。

ただプロの方で使っている方もいて、私はその時には萎えたりしません。きつと不快に思う文章には「これかいていれば大丈夫」という甘えが見えるのだと思います。

もしもその表現を使うのならば、私のような考え方もあるのだとリスクを考え、その一文（。。サイド。。視点等）に頼らない書き方をしましょう。

- 会話分（「」の前にキャラ名を書く ●

これがあると、どれだけ面白そうでも私はさよならします。分かりやすいのでは？ と先ほどのように思われるかもしれませんが、答えもまた同じ。本当にそれ、必要ですか？

たしかに会話の書き分けは難しいです。でも、それを書き分けることこそが、物書きというものと、私は思います。

キャラ名をわざわざ書くと言うことは、会話の書き分けができていないということです。イコール“書き分けを諦めた”ということに他なりません。

どうやったらどのキャラがどの台詞を話しているのが伝わるか。たくさん書いてみたり、上手い人の文章から学んでみましょう。

方法としては、一度に会話するのを二人（多くて三人）にとどめる、というのがあります。一度試してみてください。

● やたらと難しい漢字・言葉を多用する ●
私もやりがちなので、人のこととやかく言えないんですけどね。

今はパソコンで簡単に文章が打てます。パソコンは頭がよく勝手に漢字に変換してくれちゃいます。かなり難しい漢字だろうとお構いなしです。

漢字を多めにとすると、なんだか格好良い文章が出来上がります。作者からすると読み方を分かっているので問題ないのですが、読者の方からすればどうでしょうか？

「分からない漢字は辞書で調べればいいじゃないか」

「前後の流れから意味は分かるだろ？」

たしかにその通り。

でも、その読めない漢字・言葉があちこちにあつたらどうでしょうか。前後から読み取るうにも前後の文章にも難しい漢字・言葉があれば、前後の流れから読み取るのは難しい。しかもその度に辞書を引いていたら、一向に作品の中へ入っていきません。

「私はルビ（読み方）をふってるから大丈夫」

という、問題でもなかったりします。

読み方が分からないということは、その言葉の意味もよく伝わっていない可能性が高い。言葉の意味が伝わらなければ、言葉だけで表す小説にとって致命傷です。

さらに言うと、変に難しい言葉を使うと、間違った意味で言葉を使ってしまい、赤っ恥をかくかもしれませんので、なるべく使わないのが無難でしょう。

ただし、まったく使ってはいけない、ということではありません。前後から読み取れるのなら構いませんし、その言葉について説明する場面があるのならそれも問題ない。

あくまでも多用しない。そこがポイント。

対象とする読者年齢が低いのであれば、特に少なめにした方がいいと思います。

プロの方だと難解な文章を書かれる方もいます。でもプロの方の文章は、言葉そのものの意味が分からなくても、文章自体の意味はなんとなく分かるものです。安易にシロートが手を出さない方がいいと思います。

まあ、自信がある人はいいいんですけどね。

- 文章作法が守られていない文章 ●

文章作法の話でも書きましたが、段落の字下げされていないだけでも私の中ではかなりマイナス印象になります。

それでも中身が気になれば読むんですが、作法が守られていないのが気になってあまり中身に集中できなくなり、

「あ。ここも間違ってる。うわ、ここもだ」

文章の間違いにばかり目がいきます。

こんなのは私だけかもしれないですけど、せめて文章作法だけは守って欲しい。切実で超個人的なお願いです（涙）。

私だって中身が気になるんだ！ だけど集中できないこのジレンマ。……ハイ。ほんと超個人的ですみません。

- 一文一文で改行している・改行がやたらと多い・改行が全くな

い（少ない） ●

これも文章作法の項でやりました。

一文ずつ区切ると、話の流れもそこで区切れてしまいます。

ぷつんぷつんと流れが切れてしまえば、感情移入もしにくいです。わざと区切ることでその文章を目立たせる手法があります。

が、全部区切ってしまうと、この手法は使えません。

改行しまくると、ネット小説の場合はスクロールが面倒くさい。賞に出しても落とされるでしょう。

かといって全く改行しないというのも読者の方に負担です。以下、例。

寝るには早い時間だったのでテレビをつけてみたものの、若手の芸人がいじめのような罰ゲームを受けている画面が写り、即効でテレビの電源を落とした。ああいう番組は昔からキライなのだ。他にいい番組があったかもしれないが、今ので見る気がなくなった。とはいえ、他に何をしようか。今の時間は九時。布団に入ったところで、もやもやするだけなのは目に見えている。仲のいい友達に電話しようにも、携帯は充電中だ。固定電話はない。わざわざ電話ボックスまで行ってかけようとも思わない。「そうだ。漫画でも」口に

出しながら本棚に目をやる。しばらく掃除をしていなかった本棚はホコリだらけだ。風呂に入っただけというのに汚れるのはさすがに嫌だ。久々に筋トレでもしようかと腕立て伏せをポーズをとったものの、「これで汗かくのもあれだよなあ」とやめた。あれも駄目、これも駄目と考えながらごろごろしていると、いつの間にか時計は十一時を指していて、なんだかとても空しさを感じた。深く考えると落ち込みそうだったので「寝るか」と言い聞かせて、寝た。

見にくいですね？ え、そんなことないですか？ そうですか……。

- 目が痛くなる配色や見にくい背景&小さい文字サイズ ●

ちよつと話が変わる上にネット小説限定ですけども、結構多いので書きます。

どピンクの背景に黄色の文字。水色にピンク。同系色の背景と文字。白地に黒い文字。ごちゃごちゃした背景。虫眼鏡が必要な文字などなど。

おしゃれなのかもしれませんが、読者の方の目を圧迫し、負担を強いるだけなのでやめましょう。背景をどうしても使いたい場合は、テーブルタグを使うとか、方法はあるはず。

わざわざ時間を割いて精魂込めた文章なんですから、見た目だけで損するのはもったいない。それに読者の方に対するこういった気づかいは、読者の立場からしても嬉しいもんです。

白地に黒がなぜ駄目なのかというと、ディスプレイの白は長時間文章を読むのに適してません。少なくとも私は目がしばしばします。

111111のはやめよう)(111・05・29一部修正)(後書き)

例文を考えるのに一番時間使っているとか、そんなことは……。

冒頭には死体を転がせ！

タイトル何事っ？

と、思った方がいたら私の勝ちです（え）。一体なんの話か気になった方はお進みください。

物語の最初には「えっ？」と思わせるシーンを書く！

タイトルの一文はミステリーや推理ものによく使われている手法です。が、これは小説すべてにおいて適用できる手法なんです。特に私たちみたいなシロートで、無名な場合は。

どういうことか。まずは例文を。

シルヴァイグ帝国の南東、敵国ズガースン皇国との国境沿いにアサド村という小さな村はある。しかし深い森の中に存在するため近隣のミイヤ村としか交流はなく、ズガースン皇国はおろかシルヴァイグ帝国にも、アサド村の存在を知っているのはほとんどいないだろう。

というのも、アサドを囲んでいるリイギョの森は別名迷いの森といわれている。理由はリイギョの森に多く生えているタチエフという花が幻覚作用のある花粉を空気中にはなったり、木々が動いたり、ザペンデスという悪霊が人を惑わしたり、と森そのものがあまりにも凶悪すぎるからだ。他にも凶悪な生き物が大勢いるので、対処法を知らない者が一步でも踏み込めば待っているのは死、だけである。なぜそのようなところに村などつくったのか。それはアサド村ができる百年前にさかのぼる。

ここら辺で止めときましようか。書いている私もしんどくなって

きた（笑）。今即興で書いた例文なので荒いところには目をつむってください。

さて。これを読んでどう思われましたでしょうか？ え？ 面白くない？

そうなんです。面白くないんです。

ア。別に自虐じゃないですよ？

どういうことかというところ、いきなり最初に延々と説明文（もしくは面白みのない日常風景・やりとり）が続くと面白くないんです。

「でも読者の人に世界を知ってもらうために説明は必要だろ？」

はい、そのとおりです。でもここで大事なことは「最初に」という点です。

←こんな経験はないでしょうか？ ←

・ なんだか面白そうな小説見つけた。知らない作者さんだけど、ちよつと読んでみよう。

・ 読んでみたはいいいけど、説明ばっかでいつこうに物語が始まらない。

・ もうしんどいから読むのやめよう。

いくら内容が面白くても、最初が面白くなければその面白いところまで読んでもらえません。あまりにもそれはもったいない。

しかし、

赤黒い液体が床一面に広がっていた。

彼はしばし呆然と床を見下ろしていたが、ひきつった声を上げてしりもちをついた。

とか、

「覚悟するんだな！」

力強い言葉と共に首元へ突きつけられた剣を、男は冷静に眺めた。

とかで始まると、「お？」とかちよっと思いませんか？ 思わないですか？ そうですか。

ま、まあつまりですね。一番初めは「えっ？ 何っ？ 一体何がしまったの？」と、読者を置いていくぐらいがいいと思います。この「えっ何っ？」で読者はこの先を見なくなるんです。

プロの方の例を挙げてみましょうか（最初からこうすればよかった）。最初の一文だけ抜粋。

・ゼロの使い魔（ヤマグチノボル著）

「あんた誰？」

・マルドゥック・スクランブル（うぶ方 丁著）うぶの字が出ませんでしたorz

「死んだほうがいい」

・とある魔術の禁書目録（鎌池和馬著）

「——ええい！ くそっ！ くそっ！ あーもうちくしょうー不幸すぎますーっ！ー！」

・キノの旅（時雨沢恵一著）

そして暗闇が生まれた。

・小暮写真館（宮部みゆき著）

——ところで、新しい店の住み心地はどうよ？

さすがプロ。分かりやすい。

ラインナップはあれです。いま手持ちにある中で比較的わかりやすそうなのを選んだつもりです。

一番最初というのは、読み始める場所です。なので当然ながら読者の方はまだ作品内に入っていない。そんな状態で説明だとか日常を描いても、難解な専門書を読んでいる気分になります。特に異世界の場合は独自の地名や物事が出てきますから余計に。

なので印象的なシーンを最初に持ってくる。それこそタイトル通り「死体を転がす」ぐらい大胆にやってしましましょう。

たぶん最初のシーンを書き直すだけで作品の雰囲気ガラッと変わるはず。

このことはタイトルにも言えます。

平凡な題名もいいですが、今世の中に小説はありふれてますから、タイトルで目を引くのも一つの手です。あまり狙いすぎると逆効果ですが。

とまあ、今回はこんな感じで。今さらながら冒頭についてでした。
一緒に精進精進！

冒頭には死体を転がせ！（後書き）

2011・06・09（誤字修正。失礼しました）

何より大事なこと（前書き）

今さらな話ではありますが、本当に大事なことでなければお付き合いください。

何より大事なこと

さて。今回はいただいたとあるメッセージについてのお話です。
とても頷けるメッセージでした（同時に心が痛かった）。

今までで一番エッセイっぽい気がします。

完結させる覚悟はあるか。どんな言葉も受け止める覚悟はあるか。
胸に問いかけよう！

いただいたメッセージを直接載せていいのか分からないので、私
なりにまとめたのを載せます。

『なろうにはたしかにいきおいだけの作品は多いけど、だからこそ
面白いものがたくさんある。』

しかしながら、いきおいで書いているだけに未完で放置されるもの
も多くて残念。自分の作品なのだから愛着持って、とりあえず完
結という形にして欲しい』

まとめきれなかった！

けどまあ、よく分かります。ネット小説（なろうだけでなく）で
は、未完のまま一年以上放棄って作品は多いです。たしかにお金と
っている訳でもないし、趣味だから飽きてしまえばそこまで、な
のは分からなくもない。

私も好きな小説が放棄されてしまって悲しい思いをしたことがあ
ります。

とかなんとか偉そうに言ってますが、実のところ私もこうして読
者の方を裏切ったことがあります。だから私がいくら言っただって説
得力ないんです。

でも、小説を真剣に書くうえでとても大事なことだと思ったので、

こんな自分がここで書かせていただきました。

小説を放棄する理由はいろいろあると思います。

単純に書くのが飽きた方もいるでしょう。何か他の事情で書くことが出来ない方もいるでしょう。中々感想がもらえない・厳しい感想で自信をなくされた方もいるでしょう。荒らしにあっってしまったという方もいるでしょう。

だけど、責任と言いますか。自分の作品を愛して、そんな作品を待ってくれる読者の方に感謝して、最後まで書ききる！ という覚悟はやっぱり持つべきなんだろう、と最近特に思います。

といいますのも、

「とつても楽しみにしています」

「面白かったです」

「たしかにそうかもしれませんが、私はこう思います」

「こんな終わり方だったらもつとよかった」

読者の方にいただけるこれら一言一言がとてもありがたいものだと、本当に思えるようになったからです。

「思えてなかったのかよ！」

というツツコミが聞こえてきそうですが、そうですね。実感したのは、最近かもしれない。褒めてくれる感想はともかく、厳しい指摘も受け入れるのは、結構むずかしい。どっちもありがたさに変わりは無いのに、です。

●まとめ●

・完結させる覚悟を持って、公開しよう！

- ・公開する際には、感想を受け止める覚悟をしよう！
- ・読者の方を大事にしよう！

やっぱり説得力はないんで、私の言葉ではなく、メッセージをくれた方を始めとする読者の方たちの心と思って、どうか完結まであなたたちの小説こたもを導いていってください。

最後になりましたが、メッセージをくれた方、他にもここをこんなにしてくださった方、いつもありがとうございます。
この場を借りて改めて感謝を述べさせていただきます。

何より大事なこと（後書き）

言い訳させてもらいますと、小説が全く書けなくなったことがあったんです。でも、更新しなきゃ。更新しなきゃ。と、追い込んでいると精神が参ってしまっていて、よけい書けなくなる負の連鎖にパソコン見るのも嫌になってしまいました（汗）。

あ。今は元気になったんで大丈夫です。

そんな反省があるので、のんびりやってます。前は気負いすぎました。

もしも私と同じように苦しくなったら、はつきり苦しくなってしまうたと読者の方にお伝えするのも一つかと思えます。事情をきちんと話せば、きっと分かっていただけるはず。

そしてちよつと小説から離れてみましょう。

私の場合は、小説を離れると小説が愛しくてたまらなくなりました。やっぱり自分は書くのが好きでした。小説を書き続けているのは、結局その一言に尽きます。

このような場で書くことではないかもしれませんが、同じ苦しみを抱えていらっしゃる方の助けになれば幸いです。

やりがちな失敗について

やりがち、といえますか。私が実際にした失敗の数々を公開します！ ひかないでくださいね（汗）。

思い出し次第追加していきます。

やっちゃまった失敗談！

目次

- 一、主人公やキャラの名前を奇抜にしまくる。
- 二、言葉の意味を調べず（分かっていないまま）に文章内で使う。
- 三、難しい漢字・言葉を使いまくる。
- 四、独りよがりな文章。

●主人公やキャラの名前を奇抜（変わった名前・当て字など）にしまくる。

さてなぜこれが失敗なのか。

読者の立場になって考えてみてください。読者には小説に関する知識は皆無です。当たり前ですが、そうなると困った問題が出てきます。

キャラの名前が難しい専門用語に見える。

まだカタカナなら読めるのでいいのですが、漢字だと厳しいです。まず、普通には読めない。

「このキャラの名前なんて読むんだろう」

という経験はないでしょうか？

そしてキャラの名前が読めないと話の中に入りにくかったりします。特殊な読み方をする際は必ずルビを振りましょう。特殊な読み方でなくとも、登場した時ぐらいいは振っておくと私なんかはその心遣いが嬉しく思ったりします。

さてさて、勘違いされると困るのですが。奇抜な名前がダメ、というわけじゃありません。サブタイトルにもあるとおり、『しまくる』というのがダメなんです。

専門用語（小説内での固有名詞）は少なくするのが無難だと思います。

●言葉の意味を調べず（分かっていないまま）に文章内で使う。どういうことかといえますと、本来の意味とは違う意味で言葉を使ってしまうことです。

昔は『馬子にも衣装』を褒め言葉として使ってる人とか多かった。今はだいぶ減ったように思います。

他にも良く見かけるのは『知恵熱』です。頭の使いすぎでなる、という意味ではないんです。いつもは意味を載せますが今回は載せません。調べてみてください。

力不足・役不足、なんてのもそうですね（実際私間違えました）。

ただ、意味を知った上で間違った意味として書くのも一つの手法としてあると思います。かなり難易度は高いのでお勧めしませんが。

●難しい漢字・言葉を使いまくる。
以前にも書きましたが再び。

便利なもので、携帯もパソコンも勝手に変換してくれます。なのでついつい難しい漢字を使ってしまいがち。

言葉に関しても違う意味で使ってしまったたり、読者に意味が伝わりにくかったりします。

日常であまり使わない漢字や言葉は控えた方がいいでしょう。

● 独りよがりな文章。

自分勝手な、我俣な文章と言い換えてもいいです。では、そんな文章とはどんなのか。

「こうすれば面白いだろ？」

「面白いに決まってる」

と、自信満々に書いたのが透けて見える文章です。昔の自作品を今読むとそんな感じでした。いやもう、ホント、ゴミ箱に放り捨てたい作品です。

全然読者の立場に立ってない、上から目線な作品たちでしたね。……今の作品がそうになっていない、とは言いきれませんがマシにはなっていると信じたい。

なので今は推敲にとことん力を入れてます。

おかげさまで、後から見返した時に恥かしい思いをするのが減りました（笑）。まだまだあるので精進しないといけませんかね。

役立つかもしれない本の紹介！（前書き）

紹介させていただいている本の関係者様とはまったく関係ありません。

簡単に内容を紹介させていただいていますが、ご購入はご自身の判断でお願いいたします。責任は取れませんのでご了承ください。

役立つかもしれない本の紹介！

普段私が使っている・参考にさせていただいている本を紹介します。なるべく初心者の方にも手に取りやすいものを選んだつもりです。もういろいろと資料を持っている方には物足りないかもしれませんが。

書きたい話の資料を集めよう！

まず国語辞典・類語辞典などは自分の使いやすいものを探して、少しでも不安があればひきましよう（辞書を引く癖をつけましよう）。基本です。

以下に紹介している本をすべて買え、というわけではありません。資料探しの参考にしてください。

敬称は略させていただいています。

●『ゲームシナリオのためのファンタジー事典』知っておきたい歴史・文化・お約束110』

山北篤一（著） ソフトバンククリエイティブ株式会社（発行）
¥1,890＋税

《内容》

ゲームシナリオの、とありますが十分小説にも使えます。

これは異世界を作り上げるための基礎の基礎知識が載っています。たとえば「中世ヨーロッパは冒険が辛い時代だった」という歴史の知識から、マナ・魔法・錬金術などの不思議な力についてや、武器・防具、宗教についてなど、扱っている知識は幅広いです。

浅く広く、さまざまなことについて書かれてあるため、細かいことを知りたければ別の資料が必要となります。深い知識へ行く前の足がかりにどうぞ。

難点としては「ゲーム上ではこうする」といった記述があることですね。

「異世界ものを書きたいけど、どんな資料を集めたらいいのかよく分からない」

「幅広い知識が欲しい」

という方にお勧め。

内容はヨーロッパが多めです。アジアに関しても多少は載っていますが、アジア系の知識が欲しい方には物足りないでしょう。

異世界初心者には大変興味深い内容だと思います。

●『幻想 ネーミング辞典』

株式会社新紀元社編集部一（編） 株式会社新紀元社一（発行）

¥1,300＋税

《内容》

名前の通り、ネーミングを決める際に役立つ本。いろんな言葉の読み方が10カ国語（英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、ラテン語、ギリシャ語、アラビア語、中国語）で紹介されています。

五十音順の索引、カタカタ逆引き索引がついていて探しやすい。マイナスイメージの言葉「裏切り、反逆者、破壊」もたくさん乗っています。

「名前なんてイメージで勝手につけばいいじゃん」

と、思われるかもしれませんが、イメージだけでつけると「あれ、なんか似た名前ばっかになっちゃった」「あとで調べたらこの名前変な意味だった」などなどの問題が出てきます。名前辞典は一つも

つておくと便利ですし、眺めると結構面白いですよ。

●『徹底図解 幻獣事典』
のぞみえる

望獲つきよ一（著）株式会社新星出版社一（発行）¥1,500+税

《内容》

『昔話に出てくる妖精や妖怪たち。人と対立するこの世のものとは思えない異様な生物。神話に登場する巨大な怪物、そして神とも呼べる存在まで——本書ではそれらを総称して、幻獣と言っ言葉を使わせていただいた』（まえがきより）

カラーでイラストがついているため、イメージがわかりやすい。イラストもわかりかしょつきやすいかも。

内容は薄いので、作品内で使うにはもう少し細かい資料が必要。ただ、作品にこれらの生き物を出す際にはひねりを入れたいところ。紹介数もややものたりないかもしれない。けど、初めて触れるには中々いいと思う。

●『カラー版 孫子の兵法』

榎本秋一（著）新星出版社一（発行）¥1,400+税

《内容》

「なぜ突然兵法を紹介するんだ？」

と、思われるかもしれませんが、これは戦闘に使えます。

基本小説は戦闘を描写するのが苦手です。どれだけスピード感を出そうが、漫画やアニメには勝てません（描写を省くと分かりにくいし、描きすぎるとスピード感・迫力が失われる）。でも、マンガやアニメでは描きにくい駆け引き、心理描写が得意です。

この駆け引き、心理描写を書くときに兵法での教えを取り入れる、というわけです。もちろん戦争ものにもつかえますし、他にも政治

経済など応用が利きます。

兵法など今まで読んだことない方にはビジュアルから入れるこの本がお勧め。

孫子は普遍性が高く、ビジネス書としても人気が高いので、いろいろ本屋さんで自分に合ったのを探してみるのも一つです。

● 『

— (著) <ruby><rb> (発行) ￥＋税

</rb><rp>(</rp><rt>内容</rt><rp>

)</rp></ruby>

役立つかもしれない本の紹介！（後書き）

思いつき次第増やします。

唯一つ言えるのは……どんな本でも（マンガでも）創作の役に立つ、ということ。いろんな本を読みましよう。

ハッキリ書くのもいいけれど……。

今回は「こんな感じで書いてみたら文章の雰囲気が変わるかも？」という手法っぽいものを紹介。そんなたいそうなものではないですけど。

そのものズバリを書かずに表そう！

どういうことか、といいますとたとえば主人公が「ひきこもり」であったとします。そのとき、主人公のことをどう表しますか？

彼はひきこもりである。

と、ズバツというのもいいですが、ここは「ひきこもり」を使わずに「ひきこもり」を表してみましよう。いろんな表し方があると思います。

- ・玄関に行くと、靴がほこりをかぶっていた。
- ・久方ぶりに見た太陽のまぶしさに、彼は目を細めた。
- ・彼の世界はこの四畳半だった。

などなど。え？ ぜんぜん「ひきこもり」っぽくない？ そうですか。

ま、まあ、とりあえずみなさんも書いてみてください。拙作の「それぐらいで泣くなよ」(<http://ncode.syo-sei.com/n0481v/>) は「ひきこもり」を「ひきこもり」という言葉を使わずに書いています。参考になるかは分かりませんが、一つの例としてどうぞ。

一つの練習として。また「俺はもっとうまく書けるぜ」と思われ

たらずひやってみてくださいね。「ひきこもり」以外に「怒り」「悲しみ」などの感情、「物体」「美しさ」「動作」……いろいろあると思うので、やってみると楽しいかもしれません。

こうしてズバリを言わずに表すことで、よりリアルに、より説得力のある文章になると思います。感情移入もしやすいのではないのでしょうか。

「よし！　じゃあたくさん使っぞ」

というのはちょっと待ってください。なんにもかんにも使えばいい、というものではありません。

使いすぎると「くだい」文章になりますし、分かりにくく、ボヤけたものにもなります。何事もほどほどに。

シンプルな描写もまた美しいですから。

どれだけ使えばいいのか、は各々の文章で異なるのでなんとも言えません。が、どうでもいいもの（日常で使うもの、コップ・お皿・ハシなど。ストーリー上あまり関係ない物事）に関しては使わないほうがいいでしょう。

ただ立ち上がる動作を描くのに「膝を曲げ、上体を前に倒し、腕を振って勢いをつけバネのように伸び上がった」と、細かく書かれなくても困りますよね。もちろん、立つ動作に意味があるのなら書くべきですが。

書けた文章を読み直して、「なんか違うなあ」と思ったら一度この方法をどこかで試してみてください。だいぶ雰囲気が変わると思います。

今回は短いですがこれで。

擬音語・擬声語について

ガラガラドっカーンばっしゃんヌガシャーっドドドドドっガシャ
ン！

……はい、というわけで擬音語・擬声語について考えてみましょうか。

擬音語・擬声語はとっても便利な言葉！

まず擬音語・擬声語とは、『動物の音声や物体の音響を言語音によつて表した語。「わんわん」「ざあざあ」「がらがら」の類。なお、広義には擬態語を含めていうことがある。』（goo辞書より）』

当エッセイ内では擬態語も含めて考えます。

犬がワンワンと鳴いた。

雨がざあざあと降っている。

がらがらと音を立てて戸が開いた。

というような表現で使われます。

非常に分かりやすく、親しみやすい言葉です。ワンワン、とだけ書けば、私達は自然と「犬の鳴き声だな」と分かります。

なんて便利。

この言葉を使えば頭をこねくり回して変に着飾った表現を書かなくていいのです。一番最初に思いついた偉人に感謝ですね。

が！

たしかにこれらはとてもすばらしい言葉なのですが、ちょっ

と待ってください。

便利だからと言ってこればかりを使っていると自分の表現が身につきません。自分の表現とは、その書き手にしかない『味』のよ
うなものです。

表現は無限大。人によつて同じものを題材にしても違うのです。
だから『好きな作家さん』『苦手な作家さん』がいるんですね。

なので私としては「あまり擬音語や擬声語に頼らず、自分なりの
言葉で書いてみる」ことをまずオススメします。自分なりの言葉で
書いた後、やはり擬音語の方がいいなと思ったら書き換えたらい
いんです。

私は「先人が作り出した優れた擬音語に勝つぜ！」という心構え
でなるべく擬音語に頼らず書いています（それでもどうしても使っ
てしまうのですが）。

まったく使つてはダメ、という話ではありません。「まずは『自
分の言葉』で書いてみませんか？」という提案のようなものとお考
えください。

でもきつと『自分の言葉』で書くことにより、文章力・表現力が
鍛えられると思います。……きたえ、られているといいなあ。

さて、では最後に、以前ご意見をいただいた『シリアスで擬音語
を使う』ことについて（遅くなって申し訳ない）。

擬音語を使うか使わないかで、文章の雰囲気というのは大分異な
ります。

- ・ 誰も言葉を発することができず、その場には深い沈黙がおりた。
- ・ 誰も言葉を発することができず、その場はシーンとした。

この2つはそれぞれ同じ場面を現しています。どこかにありそうな文章ですな。

ではこの状況（雰囲気）について想像してみましよう。

仮に「登場人物Aの恋人Bが目の前で亡くなり、呆然としているAにかける言葉を誰も見つけれない」場面、ということにします。さて、どちらの方がより「らしい」ですか？

好みの問題ではありますが、擬音語を使わない方が「らしく」思えますね。……え、思えない？ そうですか。

まあとりあらず、シリアスな場面に擬音語はあまり向きません。学園モノや児童文学、コメディの方が得意です。

しかしながら使い方しだいではシリアスな場面でも擬音語が威力を発揮する場合があります。

私にはうまく活用できる腕はありませんが、どういう使い方か、ということ

『シリアスな場面をあえてぶちこわす』

たとえば「主人公がみんなを励ます場面である」とか「シリアスな場面からコメディへの転換」だとか。たぶん一杯あるとおもいますが、私にはあまり思いつきません（すみません）。

他には『あえて擬音語を使うことでもっとシリアスな雰囲気にする』、の也有可能かもしれません。

ということで、私は『シリアスで擬音語を使う』のは賛成です（申し訳ないことに）。

でも使い方をちょっとでも間違えると作品の雰囲気すべてを壊しかねないので、オススメはしません。使う際には自己責任の元、細心の注意を。

まあ今回は擬音語って奥が深いんですよ、というお話でした。

擬音語・擬声語について（後書き）

なにやら、お気に入り件数が100超えててびびりました。あれ、いつの間に……？

なんだか戦々恐々としつつ、久しぶりに更新します。

いや、ほんと。たいしたものじゃないですよ？

ルール・マナーの大切さ

小説書くだけなのになんでルールやマナーの話なんかをするんだよ！ けっけっ！

と言う方は、特に要注意。こういうことか気になった方は下へどうぞ。

文章に本性が透けて見えるっ！

最近、ルールやマナーを平気で破る人が増えています。ネット上だとなおさらです。だって顔が見えませんかからね。

私は創作系を扱っている検索サイト巡りが好きなのですが、そのトップページに「利用規約を守ってください」という字が、どんな目立つようになっているなと感じます。中には「規約を守らない方が増えています」という悲しい文章まで見かけます。

嘆かわしい。

で、ですね。本題です。マナー（ネット上だけでなく、現実でのマナー含む）を守ることが小説とどう関係あるのか。題で分かったかもしれませんが、

「ルール？ 別にいいじゃん破ったって」

「マナーなんて知るか。俺は俺の道に行く」

という方の小説は、読んだら読者に伝わります。

私はまだまだ読解力がありませんので全部の文章から読み取れるわけではありませんが、やはりマナーを守らない人の文章は「荒く、幼い」です。

物語自体は面白そうなのに。文章力もあるのに。なんだか不快になる文章なんです。

私の文章から何かにじみ出ているかもと、いつも戦々恐々としていますが（汗）、文というのは鏡です。書き手のいいところも悪いところも晒してしまいます。

だからといって、

「そんなの嫌だから書くのをやめる」

というのは待って下さい。

ちよつとずつでいいので、マナーやルールを知り、守っていただく。そうすると、文章と共に書き手も成長できるはずです。

読者としては、物語の楽しさもありますが、書き手の成長も1つの楽しみなんです。

皆さんも経験ないでしょうか？

『この小説、文章つたないし上手じゃないんだけど、なんか応援したくなる！』

ってこと。私だけでしょうか？

マナーを知らなかった方は、知らなかった今までを反省して、ちよつとずつ知っていったらいいのです。

最初から知る努力を放棄し、『人としての成長』を辞めてしまった人の書く文章よりも。

ちよつとずつでも『人として成長』していく人の書く文章の方が、たとえへたくそな文章だとしても、読む人に何かしらの感動を与えてくれます。

とりあえず、そういった基本を守ることと文章に違いが出ますよ、というお話でした。

すばらしい小説家の方は、やっぱり人間性もすばらしかったりしますからね。

でもその方たちだって最初からいろんなことを悟っていたわけでもないでしょうし、すばらしい作品が書けたわけでもないでしょう。

ちよつとずつ、ちよつとずつ。一緒に歩んでまいりましょう。

なんて、ただ自分に言い聞かせているだけかもしれませんが。

ルール・マナーの大切さ（後書き）

今さらですけどね。最近本当にマナーを守らない人が増えたなあ
と思って書きました。

若い人もそうなんですが、なんと言っても大人（40代50代）
のマナーが悪かったりするのを見て「子供のマナーが低下するの
も無理ないな」と、なんだか悲しくなったり。

そしてね。ああ、この人はリアルでマナーを守らない人だな、と
いう文章を見かける機会も多くなりました。

まあ、私自身も人のことをいえたギリではないのですが……。
今一度、自分に問いかける意味も込めて書きました。

今一度問い直す

今日は改めて、小説を書くことについて考えてみたので、自分の決意を忘れぬためにも書いてみます。

初心を忘れるな！

さて、胸に手を当てて思い出してみましょう。なぜ小説を書くだけで満足せず、公開したのかを。

私の場合は、読んだ方々の反応が見たい、知りたかったからです。おそらく皆さんもあまり変わらないかと思われます。小説を書くだけでいいなら、公開しなくても事足りますから。

ではなぜ反応が見たいのでしょうか？

自分の作品で楽しんでもらいたい。何かを感じてもらいたい。……そんな想いがあるからだと、私は思います。

よく「自分の書きたいものだけしか書くだけ。ソレを見た人の意見は知らない」と言われる方がおられます。それも1つでしょう。否定はしません。というよりできません。

でもみなさん、こんな経験ないでしょうか？

「この人の文章。下手なんだけど、次も見たくなる」

「この人の文章。上手なんだけど、続きはいいや」

文章の上手い下手で、作品の面白さが決まるわけじゃありません。そこに込められた「楽しんでって」という想いがどこかににじみ出て、次も読みたいくさせるのでは、と思うんです。

とはいえ、「楽しんで」もらうために書きたいことをネジ曲げる

のはダメです。さじ加減はむずかしいのですけれど。

自分の書きたいもの「で」楽しんでもらえるように努力する。

私にとっての小説とは、こういうことかな、と最近思いますし、
そうであってほしいと思います。

みなさんにとっての小説とはなんですか？

今一度、見つめなおしてみるのも、いいかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6744p/>

これから小説を本気で書こうと思っているあなたへ

2011年12月13日23時52分発行